

(社) 東洋音楽学会関西支部 支部だより

Newsletter of the Kansai Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第 3 7 号 (2000/03/01)

♣定例研究会のご案内♣

●第198回定例研究会

と き: 2000年4月8日(土) 13:00~17:00

ところ: 国立民族学博物館特設会場および研究部第3演習室

(1) 鑑賞

みんぱくミュージアム劇場—からだは表現する 『高橋悠治と「糸」』

(2) 卒業論文・修士論文・博士論文発表会

「関西に根づいた沖縄芸能『エイサー』」(卒論)

法田典子(大阪音楽大学)

「観光音楽の創出—ペルー・クスコに於ける音楽状況を事例として」(卒論)

水口良樹(京都文教大学)

「バリのバリオン劇—デンパサル市パンジェル村とタンジュン・ブンカ村を中心に」

(修論)

大坪紀子(兵庫教育大学)

(民博北側通用口で、「東洋音楽学会定例研究会出席」と告げて入館ください。第3演習室に13時までに集合してください。)

●第199回定例研究会(東洋音楽学会・日本音楽学会合同例会)

と き: 2000年6月24日(土) 14:00~

ところ: 大阪音楽大学K号館

(阪急宝塚線庄内駅下車、北西へ徒歩8分の本校より13時50分にスクールバスが出ます。徒歩でも5分。)

研究発表

(1) 「『民俗』から『民族』へ: 19世紀末ロシアにおけるバラライカとドムラの形成」

(仮題)

柚木かおり

(2) 「ポピュラー音楽研究から見た音楽学—その利用(不)可能性」(仮題)

増田聡

♪定例研究会記録♪

東洋音楽学会関西支部第196回定例研究会

報告 入江宣子(関東支部)

1999年11月28日(日) 京都・東本願寺および大谷婦人会館

(1) 拝観・見学(東本願寺御影堂) 10:00~12:00 報恩講最終日(含 板東曲)

(2) 講演と研究発表(大谷婦人会館大谷ホール) 14:00~16:30

講演「報恩講の構成と板東曲」

岩田 宗一

研究発表「真宗大谷派声明の音楽学的研究

— クリイリバネの実践上の多様性について —

澁谷 由美

報恩講とは親鸞上人の忌日を最終日とする七昼夜にわたる法要を指す。「板東曲」(ぼんどうぶし)は報恩講の最終日に、それもお東さんだけで演唱される特別な声明である。

見事に銀杏が黄葉した穏やかな日曜日、東本願寺のご好意で我々は、内陣の様子や坐ったまま上半身を激しく前後・斜め右前から左へと動かしながら絶叫する念仏や和讃を、特等席から見学することができた。「門主出仕」に際し大広間をうめた門徒の方々の、声にはならない呼吸の昂まりも強烈な印象であった。昼休みに見た別棟での展示「皮づくりと太鼓—職人の技—」では、日本の伝統芸能そして昨今の和太鼓ブームを支えているのも過酷な肉体労働であることを痛感した。

岩田氏のお話は、文字通り「西」も「東」も分らない板東育ちの私にとって、声明はもちろん報恩講の期日までも両本願寺で違うことなど、大変興味深く勉強になった。「板東ごえ」の記述は1337年の著作にすでに現れ、上半身の激しい動きは、「嵐の海で小舟に揺られて念仏を唱えている様」と言い伝えるが、澁谷氏が追加した「親鸞の臨終に際し関東から駆けつけた門弟たちが激しく泣き叫んでいる様」という説も面白い。私は六斎念仏の主要曲「板東」との関係が以前から気になっているのだが、ふたつの「板東」はともに踊躍念仏をルーツとしているという。なぜ特殊演出の「板東ぶし」を報恩講で伝承してきたのか?謎はますます深まるばかりである。

澁谷氏の発表は、自ら僧として声明の学習に励んでおられる体験から、装飾音型のひとつ「クリイリバネ」が和讃・回向・伽陀のどの箇所、どのような旋律でうたわれているかを詳細に調べ、同一のもののように思われている「クリイリバネ」が実際にうたってみると実に多様な旋律を有していることを明らかにしたものである。大谷派声明は絶対音高を持たないが、雅楽伴奏なのでおよその音高感覚は必要で、そのために楽器の練習もしているなど実践者ならではの話しもいろいろ伺うことができた。私には声明の中心となる「念仏」が、ちょうど西洋音楽のA音のように音高面でも基準になっているように思えた。

2000年2月19日(土) 大阪国際女子大学5号館8階817号室

シリーズ「伝統を考える」その9

シンポジウム「日本の音楽を海外にハッシンする」

パネリスト：シルヴァン・ギニャール 田中悠美子 寺内直子

司会：藤田隆則

日本の伝統音楽を海外にひろめる活動の比重が、研究者の間でも徐々に大きくなりつつある。大学の授業やワークショップなどを通じた紹介活動は、片手間にすべき活動ではない。まじめに考えるべき、新しい「音楽活動の場」なのではないか。その意義は何か。研究者の役割は何か。この問いからシンポジウムが始まった。

寺内氏は、海外発信のさまざまなケースを分類し、扱われる対象の全体像を(司会者にかわって!)提示してくださった(感謝!)。UCLAで授業を担当された寺内氏は、雅楽の授業の様子を具体的に記述された。受講した学生の国籍、担当教員の資格などの記述が、興味深かった。結びに、雅楽の五線譜化に情熱をかけた近衛直麿の活動に言及され、海外発信の先達と位置づけられた。五線譜化の問題は、ギニャール氏の関心へとつながっていく。

ギニャール氏のメッセージは、日本人の研究者も日本音楽の紹介の仕方についてよくよく考えるべきである、というものであった。それを前置きにして、欧米で日本の音楽を紹介するさいの自分なりの心得を語られ、レクチャーコンサートの組み方などの具体例がしめされた。ここには、エギゾチズムを退けるのではなく、それと共存する方法を模索するという、刺激的なテーマが含まれていた。

田中氏は、太棹演奏家として参加した海外公演のビデオを見せつつ、古典音楽のオーセンティシティが空洞化してしまう状況を「こんなウソがあっただけいのでしょうか?」というアイロニカルなコメント(とイントネーション!)によって提示された。一方で、田中氏は古典的「型」の表現力をも強調される。その点から、作曲家への注文、さらに関連して、音楽学者の役割にもふれられた。

出演者4名、フロア6名の小さな集まりだった。フロアからは、発信・受信という枠組み自体への批判もあった。議論がかみあい、とても面白かった。出席された方々にこの場をかりてお礼申し上げる。

♫次回定例研究会によせて♫

第198回定例研究会

毎年4月恒例の卒業論文・修士論文・博士論文発表会にあわせて、国立民族学博物館が主催する「みんなミュージアム劇場—からだは表現する」の公演の一つを鑑賞します。これは第一級のパフォーマーの公演を通じて、私たちの身体の表現の技術と可能性について、かんがえてみようとする企画です。（会期は3月18日（土）から5月14日（日）まで。）この会期中、民博特別展示館には、演者と観客が一体になることのできる4百席の円形劇場も用意されています。当日はこの円形劇場に作曲家・高橋悠治さんが出演し、雅楽器による身体の「ずれ」の音楽性について考察します。なお当日はできるだけ招待券を確保しますが、念のため入場料 800円を各自ご用意ください。

♫関西支部からのお知らせ♫

●関西支部定例研究会への発表申し込み方法について

関西支部では、定例研究会での会員相互の活発な活動を期待しています。研究発表等は下記の関西支部事務局までお申し込みください。その際、発表の種別（連続講座「伝承を考える」、研究発表、資料紹介、研究演奏、調査報告など）、題目、使用機器、発表希望月、所属、氏名、連絡先を明記してください。なお、今後の定例研究会の予定は、9月と11月の各1回です。

●入会申し込み方法・住所の変更について

入会ご希望の方は、80円分の郵便切手を同封し、下記の学会本部事務所へ入会案内・申し込み用紙をご請求ください。住所等の変更につきましても同事務所までお知らせください。

〒110-0001 台東区谷中5-9-25 第2八光ハウス201号

(社) 東洋音楽学会 ☎03-3823-5173 FAX 03-3823-5174

電子メール LEN03210@nifty.ne.jp

---

(社) 東洋音楽学会関西支部

〒673-1494 加東郡社町下久米942-1 兵庫教育大学芸術系教育講座 水野研究室気付

☎&FAX 0795-44-2261 FAX専用0795-44-2259

電子メール mizuno@art.hyogo-u.ac.jp